

8-5		主題	看取り開始のトリガーポイントについて	
看取り介護		副題	看取りと判断する材料とは何か	
研究期間	18ヶ月	事業所	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園	
発表者：上村 美智留			アドバイザー：市橋 奈緒美	
共同研究者：				
電 話	03-3309-3211	メール		
FAX	03-3326-6054	URL	http://kugayama-en.org	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	平成 21 年の 10 月ごろから看取り介護を始めました。最期まで住み慣れた場所で過ごしたいという思いや願いを受け止めるために、私たちは支援を行っています。最近では、老衰だけではなく、麻薬によるペインコントロールを含む癌のターミナルケアにも力を入れています。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》 昨年、私たちは、自然に天寿を全うするのか、それとも治療効果を期待して入院治療をしていくのか、その選択にご家族の心の揺らぎが生まれていることを発表しました¹⁾。 それに加えて、高齢者の終末期に出会うたび、ご本人の意思が明確でなかったり、ご家族がどうしてよいかわからない、選択に思い悩むという場面にも出会いました。 さらに、期待が膨らむ一方で、老人ホームとして、何をどこまでできるのかという問いも生じてきました。 そこで、本来、医師が「老化や病気等により回復不可能な状態」として看取り介護の発信を行う事になっていますが、ご家族からの要望や施設側のサービス提供量などの課題を整理していく必要があるのではないかと思いました。	《研究の目標と期待する成果》 当該施設では、ご利用開始時に、急変時や終末期をどのように過ごしたいのか、ご要望を承っています。 しかし、実際の場面に遭遇すると、思い悩まれるご家族が多いことも事実です。 そのため、「利用者様の心理・身体的状況がどのような状態になったときに最期をどう迎えたいのか」という話し合いになったのか。」という事を振り返りました。 それを明らかにすることで、看取りの導入時期の判断材料が明確になり、ご要望やこころの整理をしっかり受け止めることができるのではないか、と考えました。 また、ご利用者様やご家族が望まない方向になるのではなく、願いや希望を最期まで支えていくことになるのではないかと思いました。
--	--

《具体的な取り組みの内容》

対象は、2009 年 10 月～2011 年 4 月までに看取り介護を行った 15 名の認知症高齢者とそのご家族です。

分析方法は、介護記録、看護記録、メモ、日誌、カルテや職員の思い出し等を集約して箇条書きにするとともに、質的に内容分析を行いました。

内容のカテゴリー分けは、2009 年に公表された特別養護老人ホーム芦花ホームの「看取り介護」の調査研究報告書を参考にしました²⁾。この報告書によれば、看取り介護の意思確認方法として、看取り介護の判断基準があり、①嚥下能力や食事摂取量の低下、②食事形態の変更も功を奏しない、③痛みや苦痛がない、④病院での治療で効果が期待できない、となっています。

しかし、隣接する病院がある中で、あえて医療から切り離して看取るということに罪悪感や負担感をもつご家族もいます。加えて、はたして、看取り介護の判断基準が施設側からの発信のみであるのかどうかという点についても視点をかえてみました。

《取り組みの結果と評価》

看取り介護の判断基準は、芦花ホームのように施設側から提供された情報に対して話し合いを重ねて意志を確認していくというだけでなく、ご利用者やご家族の強い意志が表明され、それに動かされて看取り介護を実施するというケースがありました。たとえば、治療の効果の有無については、高齢者個々がもつ体力や生命力の幅が大きく、想定することが難しいため、一度は入院して治療を受けたいというご希望があり、入院しました。しかし、生命を維持するだけの嚥下・摂食能力の回復には至らず、持続点滴の状態でしたが、退院して最期は老人ホームで過ごしたいという願いを表出されましたので、その思いを尊重して、ケアをしました。

《まとめ》

看取り介護の判断基準は、日々の健康状態や治療効果の有無だけでなく、ご本人やご家族と情報を共有しながら、旅立ちの準備をすすめていく必要があります。

《参考・引用文献》

- 1) 市橋奈緒美、上村美智留：看取り介護の家族の心の揺らぎについて、アクティブ福祉 in 東京(2010)
- 2) 特別養護老人ホーム芦花ホーム：特別養護老人ホーム芦花ホームにおける「看取り介護」の調査研究報告書、平成 21 年 3 月

《提案と発信》

老人ホームにおける看取りは、生活の延長線上にあるという考え方がありますが、ご本人の意思を確認できない状況の中で、ご家族の中には、やれる事はすべてやりたい、というお気持ちがあります。ご要望が多いのは、老人ホームで最期を迎えたい、そして点滴もしてもらいたい、ということです。看護職の配置が少ない老人ホームで、医療と介護の提供量の課題が残ります。

【メモ欄】